

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

発行 佐倉市宮ノ台4-26-8

tel&fax 043-461-7004

アウシュビッツの雨にうたれて

今回のポーランド旅行は、よく雨に降られた。例年にない雨続きの5月だったそう
だ。私たちが、ウィーンに移動した後、ポーランドの古都クラクフでも一部洪水に見
舞われたというニュースに驚いた。クラクフでは、アウシュビッツ・ビルケナウ強制
収容所博物館のツアーに参加した。マテイコ広場のバスターミナルから約2時間、車
中では1時間近くの強制収容所のドキュメンタリー映画を放映している。満席の車内
を見渡したところ、日本人は私たち夫婦と中年の男性の3人だった。

最初に下車したのが、アウシュビッツ強制収容所跡の博物館で、約20万㎡に今は28
棟が残され、当時は電流が流されていたという鉄条網と監視塔が延々と続く。入り口
の頭上には、あの有名な鉄の文字”ARBEIT MACHT FREI”（働けば自由になる）がのし
かかる。各棟には、さまざまな資料や遺品、劣悪だった収容者の生活の様子が展示さ
れているが、なかでも衝撃的だったのは、家一軒分ほどのスペースにガラスを隔てて
通路に迫って来る髪の毛の山、死の直前まで身につけていただろろ夥しい数の靴、眼
鏡、義足が重なり崖のように迫って来る、その量に圧倒された。ソ連の侵攻を前に処
分しきれずに残された収容者のほんの一部の遺品である。入浴させるとガス室に導か
れた人々の無念とそれを実行させた人々の残虐を思うと、ガス室跡の入り口では足が
すくんでしまった。銃殺の壁の前の水たまりに足をとられ、止まない雨に傘を傾けな
がら聴く女性ガイドの声、通路の壁いっぱい貼られていた国別の収容者登録票、そ
の正面・横顔・着帽の3枚の顔写真の圧倒的な量とその視線を忘れることができない。
登録票には他に氏名・生年月日・収容場所・年月日・死亡年月日が事務的に記されて
いる。1枚1枚の一人の人間の生死が投げかける、その重さを忘れてはならないと思っ
た。つぎの見学コースが、バスで5分ほどのビルケナウ強制収容所（アウシュビッツ
第2強制収容所）跡の博物館で、ここはさらに規模が大きい175万㎡の強制収容所
であった。犠牲者はあわせて150万人以上に及ぶと推定されている。（U）

銃殺の壁～記憶を未来につなげたい



～福祉コーナー～

デイサービス、ご近所にオープン

ぬくもり日和 (宮ノ台 3-7-12)

モノレール中学校駅前の空き家が改装されて、いつのまにか「デイサービスぬくもり日和」の看板が掲げられていた。入り口の「ご自由にどうぞ」とのパンフレットにも、つい手が伸びた。6月1日がオープンだった。

猛暑のさなかだったが、本誌のスタッフ二人で見学をお願いした。我が家が宮ノ台に引っ越して来た22年前は、たしか不動産屋さんが店を構えていたお宅だ。当時の事務室が、今はこの施設の相談室になっている。通された部屋が利用者のレクリエーションや食事をするスペースで、食卓では、利用者のお一人が、ヘルパーさんとパソコンに挑戦中であつた。私たちは、オーナーの尾道ご夫妻にお話を聞くことができた。

お二人は福祉関係の学校で知り合い、福祉の仕事をされていたが、お年寄りのためにぬくもりのある、癒しの空間を創りたいと、昨年、一軒家を探し始め、今年1月によくこの家に巡り合い、開業にこぎつけたという。家の中の壁面は、元からすべて板張りだったのが決め手になったそうだ。なるほど、木製のシックな壁はなんとなく心を和ませる。この施設では、介護保険制度によるデイサービスは、月～金曜日、8時30分～5時30分、定員10人で、レクリエーション、食事、入浴などのほかに、リフレクソロジー、散歩なども取り入れているとのこと。それを支えるのは、ヘルパーの資格を持つオーナー夫妻のほか、3人のヘルパー、2人の看護師、生活相談員らのスタッフで、栄養士の資格を持つヘルパーさんもいらっしゃり、食事は手作りで、送迎はオーナーのご主人がドライバーを務める。また、介護保険に拠らないデイサービスも1日3000円と食事代で対応できるとのこと。法制度の枠での介護事業にも問題があるようで、通院の付き添いやドライブなどを望んでいる利用者もあり、今後の課題のようだった。身近に、このような施設があることは心強い。相談室には、お気軽にお立ち寄りください、とのことだった。尾道夫人は、「ぬくもり日和」というブログも開設、新しい仕事に頑張っている様子が伝わってくるようだった。

ヘルパーさんとパソコンに挑戦中の利用者



(連絡先：043—463—3897) (M)

元気庵ユーカリが丘店 (ユーカリが丘 1-1-6)

ユーカリが丘線公園駅から程ない、大通りに面した既存の住宅の門に突然3本の黄色い旗が立った。デイサービス・元気庵の旗だった。

八千代市を中心に小規模型のデイサービスを運営する(株)オープンセサミの8号

店で、8月にオープンしたばかりだ。賃借している住宅は殆ど改装することなく使っているそうだが、バリアフリーで内装、キッチン、浴室などが凝った造りになっている。リビングや浴室の窓からは、一面に広がる田んぼとその先の森の豊かな自然が眺められる。

定員は10人、当面は月～金、9:00～16:00までサービスが提供される。見学した時は、オープンから間がなかったのも、男性の利用者が1人だけで、テレビを見ながらスタッフと談笑をしていた。ここでは、1人1人に寄り添ったオーダーメイドの介護を実施するという。毎日の散歩や元気体操で無理なく運動機能を向上させ、転倒や閉じこもりの防止・認知症等の進行を抑制する事を目指している。

元気庵の一番の特徴はナイトケアをしてもらえることだ。まだユーカリが丘店では実施していないが、隣家も借りて準備をしているそう。デイサービスを利用している人が対象で、16:00～翌8:30までのケアで夕食と翌日の朝食を含む宿泊料金は1回5,000円。(デイサービスの料金は別途支払う)これは介護保険外の独自サービスであるが、緊急時には大変有難いと思う。

居住型の介護施設が余り増えない現状では、身近に比較的多くあるデイサービスに宿泊ができるのは便利である。このようなニーズを踏まえ厚労省が宿泊可能な24時間体制をとるデイサービスの創設を検討している。(『朝日新聞』8月24日朝刊)

元気庵ユーカリが丘店では地続きの隣家の庭も利用して、歩きやすい木製の道がある。家にこもっていた人は、ここで歩行の練習をし、徐々に距離を伸ばし散歩が楽しめるようになるのであろう。庭には花や野菜が栽培され、収穫した野菜は漬物にしたり、お土産に持って帰ったりするそう。自分で植えた花や野菜の成長を楽しみに通ってくる人もいだろう。

入浴をして昼食を食べ、歌をうたい、簡単な体操やゲームを皆でやって帰宅するというワンパターンのデイサービスには、家族の負担軽減のためや入浴介助をしてもらうために通う人が多かった。これからは、通うのが生きがいになるような目的が持てるデイサービスを希望したい。(K) (施設長 藤野博氏連絡先: 043-462-5250)

デイサービス、いろいろ・・・

平成18年度の制度改正でデイサービスも色々変わった。報酬の体系により小規模型・通常規模型・療養の3区分となり、認知症対応型は市町村が指定監督を行う地域密着型の事業となった。新たに加えられた療養(療養通所介護)は難病等のある重度要介護者又はがん末期の患者で常時看護師による観察が必要な人を対象とした定員5人以下のデイサービスである。佐倉市にはこの指定を受けたデイサービスはまだ無い。

デイサービスは男性には余り人気がなく、しょうがなく通っている人も多い。最近では男性にも喜ばれるようにとマージャンや囲碁将棋をレクレーションに取り入れたり、カルチャーセンターのように自分の希望する習い事を用意してくれたりする所もある。また、昼食・入浴サービスはなく、3時間指導員がついて各々のプログラムに基づいて体操や器械をつかった運動をするフィットネスのようなデイサービスもある。佐倉市でもレストランのような美味しい食事が出る所やレクレーションは自由参加で好きな事をして良いという所など色々な特徴をもつデイサービスが増えてきている。佐倉市のホームページによれば、市内より利用できるデイサービス事業所は103か所にも及ぶ。

菅沼正子の映画招待席 32

セラフィーヌの庭

天才と狂気は紙一重というが・・・

実在の画家セラフィーヌ・ルイ（1864～1942）の後半生を、実話に基づいて描く。芸術家の人生というのは、とかく悲運な人が多く、彼女もその例外ではないが、美術史に残るほどの評価を得たのは、彼女の死後である。人生とは、なんとままならぬものであることか。例えば、俳優のブルース・リーも、いまだにアクションスターの頂点を極めた俳優として映画史の一角に、その名は語り継がれているが、彼は、成功の階段を一步登りはじめたときに、この世を去っている。彼は自分の成功を知らずに逝ってしまったのだ。

天涯孤独のセラフィーヌ（ヨランド・モロー）は家政婦。暗い彼女の心を支えているのは絵を描くこと。「天使のお告げ」で40過ぎから始めたというその筆致は、ユニークで、静かに燃える魂そのもの。友だちは自然だけ。草原で大木を抱擁し、風のささやきに耳をすまし、花や小鳥に話しかける。その姿はまるで神と対話しているようだ。でも近所の人には笑いものにされるだけ。彼女は絵の具を独自の方法で創り出す。絵の具を買う余裕がない貧しい生活であることは確かだが、だからこそ自分で創る。花や木のエキスを、灯油や残飯などを混ぜ合わせた独特のものだが、実にエキサイティングな色合いになる。しかし周囲の人々には理解されず「描くだけむだだ」とバカにされる。ののしられることに慣れてしまっている、このセラフィーヌは、世間の風評など全く気にしない。ひたすら描き続ける。

その絵がひよんなことから、ドイツ人画商ウーデ（ウルリッヒ・トゥクール）の目にとまる。「生命力にあふれ、ゴッホに匹敵する才能」と高い評価。ウーデはピカソをいち早く評価した審美眼の持ち主。セラフィーヌが独学であることに驚き、絵の具にも注目する。特に朱色の使い方に心奪われる。でもセラフィーヌは「私だけの秘密」と、絵の具の創り方は明かさない。「絵に専念するように」とウーデは経済的支援を約束する。

「私は有名になる」と有頂天のセラフィーヌは、広い部屋に越し、画材を買い占め、車を欲しがり、ウエディングドレスを特注する。「結婚式には天使たちが集まるの」と、その目の輝きは常人の目ではない。しかし、セラフィーヌにとっては至福の日々が流れていく。

一方ウーデは、第1次大戦勃発で敵国人であるゆえにフランスから逃避する。さらに世界大恐慌で、商売は行きづまる。セラフィーヌとも疎遠になる。そういう時世とは無縁に生きるセラフィーヌはウーデが信じられなくなり、精神のバランスをくずしていく。「セラフィーヌの絵は、彼女の死後ウーデ氏により世界に紹介されていく」というラストシーンの2行の字幕が出ると涙があふれる。

（8月7日より岩波ホールにて公開）

編集後記—60号をお届けします。前号より、モノレール中学校駅横のカフェ、ネイチャー・ストゥディオにも本誌を置いていただけることになりました。ご意見、感想をお待ちしています。